

私にも 言わせて! 第149回

「広く深い」を目指して 臨床から研究を経て行政へ



札幌市保健福祉局保健所
感染症担当部長
前木 孝洋

平成16年に大阪大学医学部を卒業後、大阪府立急性期・総合医療センター(現大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター)で2年間の初期研修を終え、その後、大阪府の病院で小児科医として4年間勤務。22年より神戸大学大学院医学研究科でウイルス学の基礎研究に従事し、26年に博士号を取得。同年からドイツに2年間留学。28年6月より国立感染症研究所に勤務し、令和6年4月より現職。

私は大学を卒業し、臨床医、研究医を経て、卒後21年目の令和6年4月に札幌市に入職しました。若手とはとても言えませんが、私のこれまでの経験と札幌市に入職してからの感想をお伝えしたいと思います。広く深い知識を習得することを目指しています。

臨床医の期間

私が大学を卒業し医師として勤務し始めた平成16年は、新医師臨床研修制度が開始され、2年以上の臨床研修を受けることが必修化された年でした。大学を卒業する時点で小児科に興味があったため、自由選択の期間に小児科を研修して2年間の初期研修を終えました。その後、小児科医として大阪府内の病院で勤務する過程でさまざまな疾患を経験し、その中で、感染症、特にウイルス感染症に興味を持ちました。臨床医として勤務した期間の中では、21年に勤務し

た病院で、血液や髄液などの検体中のヘルペスウイルス遺伝子を検出するためのリアルタイムPCRが院内で実施されていたため、発熱後のけいれんで入院した乳児を、発疹が出現する前の有熱期に突発性発疹と診断できる体制になっていたことが印象に残っています。さらに同年、インフルエンザA(H1N1)pdm09が流行し、重症例を含めて多数の患者さんを担当させていただいたことは、臨床医としてとても貴重な経験となりました。このような経験を通して、ウイルス感染症に興味を持ち、22年より基礎ウイルス学の研究に従事す

ることとしました。

研究医の期間

平成22年より、博士課程の大学院生としてヒトヘルペスウイルス6A、6Bの基礎研究を始め、博士号を取得後、26年よりドイツに2年間留学し、エアランゲンという都市にあるフリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルクで、博士研究員として、ヒトサイトメガロウイルスの基礎研究を行いました。博士課程の4年間と博士研究員の2年間の合計6年間、ウイルス学の基礎研究に従事する過程で、ウイルス感染症の患者さんから採取された臨床検体を用いた研究に興味を持ち、帰国後は28年より国立感染症研究所(以下、「感染症研」という)のウイルス第一部でフラビウイルス、特に日本脳炎ウイルスの研究を行いました。

感染症研で私が着任した部署は、フラビウイルスに関わる研究業務に加えて、ワクチン検定、さらに、フラビウイルス感染症を診断するための検査も担当していました。私は臨床検体を扱った研究に興味がありましたので、検査業務を積極的に担当しました。その過程で、多くの検査は、試薬や機器の手順ならびに、その研究室で使用しているプロトコル通りに実施すれば問題なく遂行できるものの、検査を正確に実施し結果を正確に解釈するためには、基礎ウイルス学の知識を習得しておくことが重要であると感じました。さらに、研究医の期間に、研究医としての業務は、研究を行うだけでなく、申請書を書いて研究費を申請することや、研究内容を学会で発表すること、論文を執筆することなど多岐にわたることを体感できたのは

とても貴重な体験でした。その後、行政の業務に興味を覚え、令和6年4月より札幌市保健所でお世話になることとなりました。

行政医の期間

令和6年4月より、札幌市保健所で感染症を担当させていただいております。

行政医として業務を遂行する過程で、私の臨床医と研究医の双方の経験を活用できていると感じています。具体的には、ホームページを通して感染症についての知識を市民の皆さまに向けて発信する際に、臨床医として患者さんに説明した経験を生かしています。また、市内の医療機関から行政検査の依頼があった場合には検査を依頼する依頼医の視点で調整を試み、さらに、実施された行政検査の結果を解釈するのが困難な場合には、研究医の期間に習得した知識を基に、依頼医が理解しやすいように結果を伝えることを心がけています。

各業種で求められる知識

ここで、私が経験してきた臨床

医、研究医、および行政医のそれぞれの職種で求められる知識の幅広さと深さについての私案をお伝えいたします。

臨床医には、幅広い知識が求められると実感しました。専門とする分野では専門的な深い知識を習得する必要がありますが、その一方で、外来にはさまざまな症状に悩む患者さんが来られますので、自分の専門分野以外の領域についても、ある程度の知識を習得しておく必要があると認識しました。

一方、研究医には、自分が研究している領域に関する「深い」知識が求められると感じました。基礎研究においては、新しい知見を発見して発表および報告することが求められるため、自分の研究している領域で何がすでに得られている知見で、何が新しい知見であるかということも含めて深い知識を得ておく必要があります。

そして、行政医には、臨床医とは異なった領域で幅の「広い」知識が求められると実感しています。保健所の感染症担当部で勤務しておりますので、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関す

る法律(感染症法)や厚生労働省から発出されている通知などの文書を正確に理解しておくことが求められます。加えて、感染症および予防接種についての幅広い知識を習得しておくことも重要です。具体的には、結核に対しては、接触者健診の対象者について検討し決定するなど、臨床医とは異なった領域の知識が必要となります。

さらに、感染症や予防接種についての情報をホームページや文書、あるいは報道機関への公表等を通して発信することも重要な業務であるため、対面での説明以外の方法で正確に分かりやすく情報を発信するための知識・技術を習得しておくことも必要です。ですので、行政医に求められる知識の特徴は、幅の「広い」知識が求められるという点では研究医よりも臨床医に近いが、求められる知識の種類が臨床医とは異なると理解しています。

今後に向けて

今後、行政医として業務を続けていくに当たっては、「広く深い」知識を習得することを目指していきたいと考えています。

近年、さまざまな分野が細分化・専門化してきており、複数の領域で深い知識を習得するのは難しいと認識しています。さらに、市の職員は、数年単位での異動があることを考えると、行政医として求められる領域について深く広い知識を習得することは現実的にはかなり難しいと考えています。

しかしながら、研究医の期間に、深い知識を習得することを試みておりましたので、その時期に培った経験を生かして、周囲の方々と協力しつつ、業務に関して「広く深い」知識を習得し、その知識を職場の方々、ならびに市民の皆さまに発信していくことを目指したいと考えております。

謝辞

今回、執筆の機会を頂いた、札幌市保健所の山口亮所長と、島根県雲南保健所の柳樂真佐実所長ならびに、令和6年度に着任した私に温かく接してくださいっている札幌市保健所の皆さまに感謝申し上げます。